

若葉が薫る頃となりましたが、皆様には新年度の数々の行事でお忙しい日々を過ごされているかと存じます。現在のPF執行部体制も今年度で2年目となり、本格的に重要課題に取り組む年となりそうです。我々の放射光科学研究施設は、大学共同利用機関法人であるKEKの下にあり、放射光コミュニティの学術研究の発展・振興に資するという国家政策に基づいて設置されている施設です。この基本的な考え方に従って、今後ともコミュニティの皆様との密接な連携の基に施設運営を進めて参りたいと思います。どうぞご指導・ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

今年度のPF運営について

PFの運転・維持・管理経費は、KEKに配分された特別教育研究経費の中の「放射光による実験研究」経費から支出されています。これまで減少の一途をたどってきた予算ですが、今年度は何とかそれに歯止めがかかりました。しかしながら、これから夏にかけて電気料金の大幅な値上がりが見込まれていますので、今年度のPF運転時間の確保のためには、昨年度同様の様々な努力を行って行く必要があります。また昨年度より引き続き、VSX挿入光源ビームライン(BL-2, 13, 28)と最後の短直線部ビームライン(BL-15)の整備は予定どおり進めていきます。また、新しいサイエンスの芽を作るものとして、PFにおいて軟X線高速ダイナミクス測定(時間分解の軟X線分光・磁気円二色性測定など)が出来るような環境整備を行って行く予定です。一方、PFシンポジウムなどでも既にご報告しておりますように、PF-ARとSuperKEKBの入射の両立を図るため、PF-ARへの直線入射路を確保する準備も進めていきます。この整備により、PF-ARのトップアップ運転と輝度向上が期待されます。

限られた予算・マンパワーの中で効率よく大学共同利用を行い、研究教育活動をより活発化させ、そして将来光源での利用研究に向けた準備を行うために、放射光科学第1・第2研究系のグループ体制を大幅に見直しました(<http://pfwww.kek.jp/orgchart/indexj.html>)。今年度より本研究系は、ビームラインの維持・管理等を行うビームライングループレイヤー(5つのグループより構成)、PF全体の基盤・安全技術および共同利用・広報の仕事を行うグループレイヤー(2つのグループより構成)、新しい手法・検出器開発などを進めるワーキンググループレイヤー(WGL)という、3つのグループレイヤー体制で運営を行っていきます。WGLは、時限付きで明確な目的を持ったもので、将来光源へ向けての準備という任務も合わせ持っています。現在は超高速ダイナミクスWGと先端検出器開発WGの2つのグループだけですが、今後、コヒーレンスやナノビーム利用、X線非弾性散乱などを目指したWGが作られていくことを期待しています。これらのWGは、PF外部に向かって開かれていくものです。現状では、外部ユーザー

の皆様から見たときには、ほとんど変化は感じられないと思いますが、このグループ体制改革によって、PFの中長期戦略を支えていく骨格ができたと考えています。

PFの将来計画について

昨年度後半から今年度初めにかけて、放射光科学コミュニティの皆様からKEK物構研PFの将来計画に対して、数多くの叱咤激励の声を聞かせて頂ける機会に恵まれました。

まず、次期KEKロードマップの中間まとめに対して、放射光学会とPF-UAから「放射光にかかわるKEKロードマップに対するコメント」と「KEKロードマップ2013中間まとめに関する要望書」という形でご意見を頂きました。そこでは、KEKが日本全体の放射光科学の発展に対して果たすべき役割について、具体的なお提案を頂きました。これを受けて本ロードマップの改訂版を作成しました。4月5、6日にはKEKロードマップ国際レビュー委員会が開催され、このロードマップに対する評価や数々の有益な示唆を頂きました。その委員会報告でも、KEKにおける放射光科学のあり方について、より明確な形の提案を頂きました。この報告書はKEKのホームページの中で、近日中に公開されるものと思います。

去る2月7、8日には第7回PF-SAC(PF Science Advisory Committee)が開催されました。そこではPF将来計画などに関する問いかけを行い、PF-SACからの返事を頂きました。その報告は後ろに詳述致します。

そして3月末には、日本学術会議のマスタープランの公募に対して、日本放射光学会が放射光科学の将来計画をまとめる形で応募しました。このマスタープランは、日本の科学者コミュニティの代表である日本学術会議が、第22期学術の大型施設計画・大規模研究計画に関するプランを策定するためのものです。放射光学会からは、「新しい時代の科学技術立国を支える放射光科学の高輝度光源計画」が提出されました。この計画は、高輝度放射光施設の早急な建設・運転開始を提案したもので、将来の展望として回折限界光源の実現を見据えた計画となっています。この計画書の中の「主な実施機関と実行組織」の中には、「高輝度3GeV光源建設は、これまで世界のトップランナーであるSPring-8の建設、高度化で実績のある理化学研究所やPF、PF-ARの建設、高度化で長年の経験と実績があるKEKが中心となって、全日本の協力体制のもとに建設・運営を行うのが妥当である」との記述があります。

このようなユーザーコミュニティからのご意見に真摯に耳を傾けながら、次期KEKロードマップにも書かれますように、KEKが「日本全体の放射光科学の発展に対して先導的な役割を果たす」ことが出来るようなPFの将来計画を策定し、それを着実に実行していきたく考えています。